

公開対談 『ゆめいろのパレットⅡ』の原画と絵本を語る

平成 18 年 1 月 10 日

画家 スズキコージ

安曇野ちひろ美術館館長 まつもとたけし 松本 猛

<はじめに—野間国際絵本原画コンクールとは>

中 西：ご紹介いただきましたユネスコ・アジア文化センターの中西でございます。本日は新春早々のお忙しい中、この『ゆめいろのパレットⅡ』の原画と絵本を語る」の公開対談に、このように多くの方にご参加いただきまして、心から御礼を申し上げます。

「ゆめいろのパレットⅡ」の展示会は、同じフロアの「本のミュージアム」で開催中ですので、ご覧いただいたと思います。これは、ご紹介がありましたように、私どもの事業であります「野間国際絵本原画コンクール」の入賞作品 33 点、71 枚を展示したものです。この野間の絵本原画コンクール、野間という名前が付いていますように、いわれを申し上げますと、1978 年にスタートしています。当時、私どものセンターの副会長であった野間省一講談社社長が国際図書賞を受賞し、その賞金を有効に役立てたいと考え、子どもの夢を育てる絵本の振興として、世界の中には能力を持ちながら作品発表の機会に恵まれない人たちが多くいる、そういう人たちのためのコンクールをやりたいということで、始めたものです。1978 年からスタートし、二年をかけて作品の募集をし、審査を行い、展示を行っているということで、今回は第 14 回となっています。第 14 回については、49 の国から 439 点の応募があり、その中からの選りすぐり 33 点が現在展示されています。この「野間国際絵本原画コンクール」は、対象としている国がアジア、アフリカ、中近東、中南米ですが、既に絵本文化が盛んであるヨーロッパや日本は対象にしないということで、それらの国の人々に参加していただいています。この「野間国際絵本原画コンクール」がきっかけとなり、その後絵本作家として大活躍をする人が数多く出てきています。そういう意味でも、このコンクールの意義は大きいと思っています。今回大賞を受けられたモンゴルの「ジルーのうち」のボロルマー・バーサンスレンさんについても出版の話が進んでいると聞いています。本日はこの「ゆめいろのパレットⅡ」の展示会にちなみまして、その審査を担当していただきましたスズキコージ先生と松本猛先生に来ていただき、作品の見所、あるいは絵本について幅広くご対談いただけたらと考えております。どうぞよろしくお願いたします。先生方、お忙しい中をおいで下さりありがとうございました。またこの対談につきましては、国立国会図書館国際子ども図書館と共催ということで、大変お世話になりました。改めて御礼申し上げて、簡単ではございますが、ご挨拶とさせていただきます。

<共通して印象に残った作品>

司 会：皆さんこんにちは。ただ今ご紹介にあずかりました ACCU（ユネスコ・アジア文化センター）の大賞でございます。それではただ今から、第14回「野間国際絵本原画コンクール」の日本人審査員お二人をお迎えして、ただ今公開中の「ゆめいろのパレットⅡ」で展示されている作品について、じっくりとお話を伺ってまいりたいと思います。短い時間ですが、皆さまどうぞお付き合いのほどよろしく願いいたします。今回で14回目を迎える「野間国際絵本原画コンクール」ですが、439点の応募があり、その中からグランプリがモンゴルの方に、次席が中国とスーダンの方に、佳作がイランをはじめ10点選ばれています。松本猛さんは、今回審査員としては二回目、スズキコージさんは初めて審査員として加わっていただきました。まずお二人が共通して印象に残った作品を四つ選んいただきました。正面の画面をご覧くださいながら、いろいろなお話を伺ってまいりたいと思います。

最初にお二人が選ばれた作品ですが、何と言ってもグランプリの作品です。モンゴルの若い女性画家のボロルマー・バーサンスレンさんの「ジルーのうち」です。既に会場で原画をご覧になった方もいらっしゃると思います。まず松本さんに、どういった点でこの作品を、高く評価されたのでしょうか。

松 本：このボロルマーさんは、まだ二十代の方です。審査した時は、何歳か知りませんでした。先ほど写真が出ましたけれど、若くて美しい方ということは知らなかったもので、この方を特別あつかいしたわけではありません。この作品は、ものすごく新鮮でした。なぜ新鮮かと言うと、題材が、普段見慣れている日本やアメリカやヨーロッパの絵とは違っていた。例えば、これはパオの中ですが、描き方を見ると、壁や床の部分、どこの部分も平坦に描かれています。つまり、日本の浮世絵のようにフラットな面で構成しているのですが、実はここにも細かい模様があって、その中にもいろいろな変化がたくさんあるのです。その緻密な仕事のエネルギーは、正直言ってすごいと思いました。それから、原画を見た方がもっときれいですが、この方の色感、紫や黄色を見てもそうですが、とても大胆です。実はブルーというのは、遠近法を使わなくても、遠くを感じさせるところがあります。そういう意味で、ブルーの使い方が上手いです。形を描く技術というのは、訓練することによって、ある程度上手くなっていきますが、色感というのは、なかなか訓練では上手くなりません。その意味で、この人の持っている色の感覚はとても素敵だと思いました。

司 会：たしか彼女は二つの作品を応募してきて、最後までどちらの作品を残すかで、非常に議論になったと思いますが、スズキコージさんは、この作品についてどういったご感想をお持ちでしょうか。

スズキ：まず、毎日の生活がほのぼのしている。じっと見ていると、なんだかうれしくなるような、喜びにつながるようなそういうものが満ち満ちていました。この人の作品が二つあって、賞に選ばなかった方は、少し硬い感じがしました。賞に選んだ方は、日常の生活が喜びとともに出ているということで、文句なしにいいなど、ポイントとしてしまったわけです。

松 本：アピール力がある絵の一つの要素は、生活感が伝わってくるかどうかということです。部屋の中の空間を見ても、ここに靴があったり、食べ物があったり、壺のような大切にしているものが置いてあったり、ここには音を出せるものがあったりと、いろいろなものがきちっと細かく描かれています。この赤ちゃんが、別の絵の中ではひつじの毛の中に入っていたりと、見ていくことによって、その人たちの生活が私たちに伝わってくる。これは、引越しをしながらいろいろなところに行く話ですが、ストーリーを知らなくても、この人たちの生活が見えてくる楽しさがあります。細かい部分を見ても、全体を見てもきれいで、細かい部分を見れば見るほどこの人たちの生活がどのようなものなのか興味が湧いてくる。絵本の絵の面白さの一つはそこにあると思います。絵をどれだけ読めるかということです。その意味で、この作品は非常に力があつたと思いました。

司 会：お二人のお勧めの次の作品は、次席となったスーダンのイブラヒム・アダムさんの「動物たちの競走」です。スーダンという国は、日本にはあまり馴染みのない国ですが、実はこの「野間国際絵本原画コンクール」では、過去に二回ほどグランプリを受賞しています。私どもは、スーダンという国に多彩なアーティストがたくさんいることを、事務局として実感しています。松本さん、このスーダンの作品はどのようにご覧になりましたか。

松 本：スーダンの画家では、グランプリを取られた二人の方と話をしたことがあります。絵描きだけではなかなか食べていけない、だからサウジアラビアに出て行ったとか、語っていました。「野間国際絵本原画コンクール」で賞を取ったのは、二回続けてだったでしょうか、忘れましたが、若い人たちへの励みになっていると思います。スーダンの人たちの一つの特徴は、色彩の鮮やかさだと思っています。この「動物たちの競走」は、十二支の物語に少し似ています。どこかの王様になるために、よういドンで競走していき、一番早く着いたものがなれるというので、一番速そうな犬のしっぽにつかまったトカゲが、最後にひょいと飛び乗ってトップになるという話です。みんな必死で競走している場面が、ぐるぐる回るイメージで描かれています。こういう動きを表現するのはすごいと思います。これは横の動きですが、スピ

ード感はなかなかのものです。それがきれいな色彩とともにあるのは、見事です。コージさんの色彩もとても素敵ですが、それとはまた雰囲気が違います。スーダンに行ったら、コージさんもまた違う絵を描くのではないかと思います。

スズキ：この絵を最初に見た時に、やはりミュージックを感じました。異様に流動感のある、音楽が聞こえてくるような絵だと思って、これはかなり絵を描いている人だと思いました。毎日描いていないと、こういう素敵なミュージックのような絵は生まれてこないと思って、とても刺激的な作品でした。

松 本：コージさんと相通じるところがあるのではないですか。これは、どういうところから描きはじめると思いますか。

スズキ：僕は、一番描きたいものから描きます。そのヘビの頭のところから描くかもしれない。

松 本：それが決まると、あとが出来てくるのかな。

スズキ：まあ、これでぐるっといって、描きたいものから描いて行って、あまり描きたくないものは描かなかったり、遠くにもっていったりしてしまいます。僕の場合、先ほどのモンゴルのパオにしても、好きなものから描いてしまいます。韓国のやり方で逆遠近法等もあるようですが。例えば、お寿司屋に行って、まず何から食べるかという、最初からおいしいものを食べるか、後にとっておくかなどと、皆さんもいろいろと食べ方の順番があると思います。絵を描く時は、一番描きたいものからいくということが多々あります。

松 本：見ていてこの絵はやはり楽しいです。絵描きがどこから描いたかはわかりませんが、描きながら、これはこういう模様にしようとか、いろいろなことを少しずつ考えているような、そういう描き手の楽しみ方が、見ている側にも伝わってくる気がします。

スズキ：あとは実際に描いた彼は、こういう動物たちと身近にいる感じがするよね。かなり彼の周りには動物たちが一緒に共存していると感じました。そうでないと描けないよね。動物と人間と一緒に暮らしているということ、ひしひしと感じます。

司 会：先ほど松本さんがおっしゃったように、スーダンというのは、画家がサウジアラビアで活動したり、このコンクールで入賞した方が受賞をきっかけに国外に出て更

に活動の範囲を広げたりするというように、国内では非常に活動がしにくい国だと聞いています。そういうこともあり、作品は実にいろいろな画材を使って描いて送ってくれているということがわかってきます。ただの画用紙ではなく、いろいろな紙質のもの、そこにあるものを大切にしながら絵を描いて送ってくるということが伝わってきます。

スズキ：審査員を初めてやらせてもらって感じたのは、原画が、絵本の原画なのでだいたい15点ぐらいずつ積んであるのですが、僕はけっこう鼻がいいので、臭いをかいでいくと独特の臭いがしてきます。臭い勝ちです。やはりいい作品は、いい臭いがしています。日本のイラストレーターや絵本作家の紙は、東京の画材屋で買ってきた紙ですが、いろいろな国の画材や紙の臭いがして、それがまず楽しかったです。

松 本：この人は、オーソドックスに絵の勉強をした人でしょうか。

スズキ：これは、していないのでは。

松 本：上手い人が崩す例もありますが、これはどちらかわかりません。デッサンをしっかりやってしまうと、そこから逃れられなくなってしまい、つまらない絵になる人がいます。全然勉強をせずに、勝手にやるために面白くなっていく人も中にはいるのです。もちろん、しっかりやった上で完全に自由になる人も世の中にいます。この作品はどちらなのか、正直僕にはよくわかりません。

スズキ：デッサンというのは、その人の目で見ると感じます。日本で、デッサンを勉強しましょうというと、なにかこう上手くなるということ意識して、すごいやらしいと思っていて、やはりこの人のデッサンは独自の目で辿っていつているので、見事だと思えます。かなり恍惚のエクスタシーの作品です。

司 会：アフリカの作品については、スズキコージさん一押しの作品も後で出てきますので楽しみにしていて下さい。では次に、コロンビアのロデスさんの「小人国のリリパットのガリヴァー」です。これは今回の図録の表紙にも使われている作品です。いかがでしょうか。

スズキ：グラフィックイラストレーターのセンスを感じます。ものすごく細かく描いてあって、僕も二十代の頃はこれくらい細かい仕事をしていたけれど、センスがかなりグラフィック的なものをこの人の絵には感じます。よく描いているなあ。グラフィック的な作品は、結構どこかで見たことのあるものが多いのですが、この人の場合

は、非常にオリジナリティを感じて、僕はあまり一押しの作品ではなかったですが、見事だと思います。

松 本：これはコラージュをたくさん使っています。このミシンもひよっとしたら写真から作っているかな。これはちょうどガリヴァーの洋服を作っている場面ですが、後ろの型紙も、下の布も、コラージュではないでしょうか。コラージュには何種類もあります。全然関係ない素材を使って、それを貼りあわせて別の絵を作ってしまう面白さもあるのですが、この人の場合は、関係するものを全部使ってコラージュしています。ですから、背景にある寸法は、小さな二人の職人が一生懸命型紙を作る時のイメージだと想像させてくれます。実際に使っているものからイメージを膨らませるということ、非常に上手く使っていると思いました。

スズキ：コロンビアというと中南米ですね。これも独特の音楽が聞こえてくるような感じですよ。

松 本：この人の特徴は、例えば、首のところにいろいろなデザインをしています。首が長くて気持ち悪いと言えば気持ち悪いのですが、楽しんでます。そういう意味で言うと、ファッションに随分興味のある人だと感じました。

司 会：四番目の作品をご覧くださいませ。イランのアミン・ハサンザードさんの「月の狩人」です。大変美しく、詩的な色合いと構成のある原画だと思いますがいかがですか。

スズキ：イランの作品は、今回 150 点ほどあって、とても多くて、なぜこんなに多いのかと聞いたら、国で奨励しているというようなことを聞いた覚えがあります。その中でも、これはかなりいい方で、他は結構似たようなパターンのものが圧倒的に多かった。この絵はセンスを感じました。

松 本：作品というのは、写實的に描いた作品と、そうではない作品とがありますが、この人の場合にはかなり抽象化しています。この絵では、具体的な形は洗濯物だけですが、なんとなくこれが漁師の町だということがわかります。たぶん、このへんに海のイメージがあって、網目のスクリーンを押し付けているのだと思いますが、漁師の網のイメージが感じられます。この形はひよっとしたらマストかもしれないし、これが砂浜かもしれない。色彩の中から海を感じさせたり、一方で洗濯物がぶら下がっているところから町を感じさせたり、構成の工夫をしている人だと思います。見たように描くのではなく、いろいろな部分をつなぎ合わせて一つのイメージを作

り上げる。なかなか構成の上手い人です。この絵本のポイントは、全体を通して描かれる、ブルーとこのすごい赤とのコントラストです。人間の肌の色、魚の赤、全部同じ色を使っています。この色のリズムとブルーのトーン、その配置の上手さが、気持ちよさを作り出すのだと思います。色というのは、重ねていくことによって深さが見えてきたりしますが、下の方のブルーも質のちがう青を重ねています。そういうことで深い海を表していたり、あるいは白さの中に光があったりと、いろいろなものが見えてきます。絵というのは文学を構成するのと同じように、実は色面を構成することによって、深い世界を感じさせているところがあります。

<それぞれが推した作品>

司 会：ここまでは、お二人が共通して印象に残った四作品をご覧いただきましたが、次は、お二人がそれぞれ印象に残っている作品、高く評価する作品をご紹介していただきたいと思います。まず、スズキコージさんは、アフリカのカメルーンの画家であるピーター・ムサさんの作品「仮面の男」に、非常に心を奪われて、終始、作品の前から動かなかった印象もありますけれど、どのようにこの作品をご覧になったのでしょうか。

スズキ：僕はこの人にグランプリをあげたかったです。はっきり言っちゃうと。一押しでした。この場面では、左側に書いてある教会に来ている人たちの群集がありますが、あの人たちのタッチや表情がとにかくとても面白いです。画材が蛍光マジックなどふつうの文房具屋で売っているようなもので描いているのですが、なんだか見飽きないというか、しかも形がユーモラスで、ものすごく好きな絵です。この場面は、めっちゃめっちゃおかしくて、左の怪物みたいなのが、僕もああいうものをよく描きませんが、たまらないです。こっちの男たちが、頭蓋骨で頭が半分ないような者もいたりして、斬新で、潔い感じで、周りに描いてある植物もとてもオリジナリティを感じて、カメルーンには行ったことはないけれど、これは面白いと思った作品で、今回この作品に出会えて、審査員をやらせてもらってよかったと思っています。

司 会：この作品の一番左側の方はコージさんだったりしてなんて思っています。松本さん何か反論はありますか。

松 本：これはコージさんがいなかったら残らなかった作品です。

スズキ：他に誰もいいという人がいなくて、僕だけだった。

松 本：この作品を推さなかった理由は、たぶん二通りあると思います。一つ目は、この

絵を見て下手だと思った人は推さなかった。僕は、この人がわざと下手に描いているのではないかと、いやらしさを感じました。ここなんて、結構上手いし、ここのドアの向うがしっかり抜けている感じが作れているとか、実際にはこの人は結構上手い人だと、僕は思います。上手い人がわざと下手っぽくみせて描くというのは、やり方としてはあります。日本の絵描きでも、テクニシャンの人がわざと下手に描いて、その面白さを見せていくという場合も、もちろんあります。中には、いいものもあります。けれど、それはオーソドックスに描いている人たちに対するカウンターパンチです。わざと下手にすることによって、意外性を出して、こっちを向かせるようなテクニックです。それをやっているのではないかと、僕はちょっと嫌だと思いました。

スズキ：はあー。なんで、面白いじゃない。

松 本：コージさんに言われると、頭半分へこんでいるところなんてすごいなとも思いますが、うーん。

スズキ：とにかく松本さんはそういう裏を感じているかもしれないけれど、僕は、楽しく描いているということをまず感じました。見ていてとにかくおかしいです。

松 本：あとでこの人の略歴を見たのですが、すごいです。

スズキ：ああそうなの。

松 本：いろいろな国々、例えばイギリスだとかに留学しつづけていて、とてもオーソドックスに勉強している人です。僕が知ったのは、落としてからの話ですが。

スズキ：略歴は僕の対極にあるものなのでね。

司 会：ということで、次に松本さんが推した作品です。パク・チョルミンさん、韓国の若い画家の作品「怖くなんかないぞ！」です。この作品を推された理由はどういうところにありますか。

松 本：今の対極です。要するに、ちゃんとオーソドックスにやっている人をきちんと評価してあげたいという気持ちがどこかにありました。もう一つは、これは、森の中にいる妖怪みたいな怖いものに出会っていく話ですが、絵の中のいろいろなところに妖怪が隠れています。暗闇に目が二つあったりして、子どもの頃に夜肝試しをし

に森に行ったりすると怖くて仕方なかったですが、そういう子どもの気持ちが、わかっている人だと思います。これは隠し絵というスタイルで、いろいろなものの中に形を仕込みつつ、きれいに隠していく。絵を見るとき面白さの一つとして、発見する喜びがあります。ですから、一枚の絵には、物語が潜んでいいだろう、と思います。いわゆるファインアートと言われる額縁に描かれている一枚絵というのは、必ずしも物語とつながらなくてもよかったり、造形的な美しさだけで勝負できたりしますが、そうではなくて、物語を絵の中に潜ませるというイラストレーションの王道と言いましょか、それを正面からきちんと一生懸命描いている。技術的にもすぐれたものを持っています。カウンターパンチばかりを評価して、きちんと一生懸命描いている人を評価しないと、どこかでまずいことにならないかと思い、先ほどの作品と対極の意味でこちらを評価しました。

司 会：たしかこの方は、前回のコンクールで次席でした。

松 本：前回もよかったのですが、本当はこちらの方が面白かったかもしれない。前回と今回が逆だったら、これが前回のグランプリを取っていたかもしれません。

司 会：では力としては、今回の方が伸びてきているという印象ですか。

松 本：今回の方が面白くなってきていると思いました。

司 会：コージさん、反論がありましたら、いかがですか。

スズキ：松本さんのお話を聞いて、なるほどなあということで、さすが名医は違うと思いました。僕は描く方なので、どちらかと言うと患者側で、今日はその医者と患者の関係で二人が来ているのです。「そうね、これでもいいなと思うよ」という感じですね。

<イランからの応募作品>

司 会：それでは次の作品です。先ほどコージさんから少し話が出ましたが、実は今回かなりイランからの応募作品が、異常とも思える数が寄せられました。応募総数が 439 点のうち 186 点がイランの作品で占められました。そのうち 12 作品が入賞しています。日本におりますと、イランと絵本作家、イランとアーティストというものがなかなかイメージ出来ません。ですから、皆さんも大変ご関心をお持ちかと思います。

私も二年前にイランに行った際に、絵本作家や画家の活動が非常に制限されていて、一つは、主な著作権条約に加盟していないこと、なかなか海外に紹介してもら

えるチャンスがないので、国内で必死に競い合っていること、そういった意味でイランの作品がかなり多いというのも国情を反映しているのかと思いました。松本さんも、かつてイラン政府が主催していたビエンナーレ、イランの絵本コンクールの審査員として行かれていると伺っています。二回ほどイランには訪問されています。その当時の印象と、今回多数の応募があったこと、これだけ応募があるとグランプリを取ってもいいのではないかという印象もありましたが、これだけ送り込んでいながら、なぜイランが上位を取れなかったのかということも含めてお話を伺いたいと思います。

松 本：イランは今までに何回かグランプリを取ったことがあるのではないのでしょうか。ですから、いつもイランというわけにはいかないのかもしれませんが。アジア絵本原画展がテヘランで何回も行われていて、その審査員として呼ばれたことがあります。ものすごい層の厚さです。年間の絵本の出版数が、たしか日本より多かったと思います。ただそれは著作権条約の問題や、宗教に関連するストーリーが多いこと、日本やヨーロッパでは翻訳する人がいないというような理由からおそらく私たちの目になかなか触れないのではないかと私は思います。イランに行って、このイラストレーターたちと話をした時に言われたのですが、彼らは非常に日本に親近感を持っています。僕が日本というのは西域からいろいろな文化が伝わってきて、日本に溜まっていき、様々な文化的蓄積があって、面白いものも生まれてきているという話をしたら、実はイランも同じなんだよと言われました。東からと西からの両方からの文化が全部重なって、そこで溜まっていくのがイランなんだ、ペルシア文化なんだと言っていました。だから多様な表現がここにはあると言っていました。

実際に、いろいろなタイプの絵描きたちがたくさんいます。この国の人たちは、文字というのもデザインの一つと考えています。この絵でいうと、周りのデザインもそうです。例えば、ペルシア絨毯はとても有名ですが、いろいろな形を抽象化した紋様が発達しています。この炎にしても、日本の古い絵の炎のスタイルに似ています。これもパターン化している炎です。そういうふうに、いろいろなものを整理していく力を、たぶんこのエリアの人たちは持っているのだと思いました。文化的に豊かな国です。このマルジャー・ヴァファエアンさんの「小さな緑のヤギの足音」は、町なのです。小さな家がびっしり書き込まれています。そしてよく見ると、家の窓がだいたい二つずつあります。それぞれの家が顔に見えたりします。ここに突然のように空間が浮かんで、部屋の中がぼこっと入っていたりします。自転車に乗ったり、いろいろなものがこの中にありますが、日本でいうと、野田英夫や松本竣介という二十世紀の前半から後半にかけて活躍した絵描きさんたちが、町の風景を描く時に、顔のアップを組み込んだり、いろいろと構成しながら描きました。色調は全然違いますが、ちょっとそれに似ているところもあります。

このアザデ・マダニさんの「ネコ奥さんと子どもたち」は、三階か四階だかに住んでいるネコの家族の話だったと思います。アパートの部屋をこのように抽象化して作ってってしまう、これまたすごい感覚だと思います。ネコの家族の子どもたちが周りにいるのかな。後で原画を見ていただくとわかりますが、色が非常にきれいです。微妙な同系色の色をバランスよく組み合わせていって、不思議な空間を作っている。イランでは、こういう色感で勝負する人が実は非常に多いのです。これはややメルヘンぽい形で作っています。実際イランに行って展覧会を見た時に、無数にこのレベルの絵描きたちがいる国だと認識して、正直言って驚きました。今回を見ている、佳作の中に結構たくさん入っています。グランプリは取っていないけれど、佳作に山ほど入っているということは層が厚いということだと思います。

司 会：ありがとうございます。スズキコージさんはいかがですか。

スズキ：そんなに絵本が盛んだと初めて知ったくらいです。ほんとに「イランは絵本はいらんかな」と思っていたけれど。今の松本さんの話を聞いていると、僕はバリ島に七、八回行っていますが、ウブドという村に行くと、例えば、タクシーの運転手の四人兄弟が全員絵描きで、四人が同じような絵を描いているのを見せてもらったのですが、どれも同じようで、どの絵がお兄さんで、弟なのかわからないくらい。それで、アメリカからバイヤーが来て、下から二番目の弟の絵がどんどん売れて、兄弟喧嘩になってしまった話を聞いたことがあります。イランの絵からは、そういうようなものを感じました。今ここに出ているのはかなりユニークな方だと思います。

司 会：たしか審査の過程の中でも、松本さんがこの作家の作品は、この作家のオリジナリティがどこにあるかというのは国内で他の方にあるかもしれないと、ちらっとお話されていましたが、そこらへんのことはいかがでしょうか。

松 本：国際アンデルセン賞を取っている人もいて、そういう優れた絵描きの絵のコピーっぽいものも結構あります。これは難しいところで、中国や日本の昔の絵というのは、オリジナリティというよりは、お師匠さんの絵と同じように描くということが、実は勉強だったし、それがとても大切なことだったのです。個性よりも伝統的スタイルを守ることの方が重要だった。そういう文化がまだ残っているのかもしれないと思うと、一概に、昔の有名な人の作品に似ているからといって、オリジナリティがないと切ってしまうのはいけないのかと思ったりもします。そのへんは、ちょっと難しいところです。

<国際審査員に加わって>

司 会：今後イランがどんな作品を送ってくるか楽しみなところですが、審査会を振り返って、特にスズキコージさんは今回初めて国際審査員として加わられたわけですが、率直なご感想をお聞かせいただきたいです。

スズキ：まず、この野間さんの絵本原画コンクールで素晴らしいと思ったのは、ヨーロッパでは絵本原画展というのはけっこう知られているもの、例えば、ブラチスラバ、これはチェコスロバキアです。

松 本：ちょっといいですか。ちょうど今見ている絵が次席になった中国のツェン・ロンさんの「雷神」です。僕もコージさんも推さなかったものですから画像として出てこなかったのですが。

スズキ：ああ、ものすごく上手い人だ。達人という感じの。

松 本：後で原画展を見て下さい。決して悪いから出さなかったのではなく、たまたま僕もコージさんも…。

スズキ：でも僕は票は入れたよ。

松 本：僕も一票入れましたよ。だから次席になったんですよ。確かに上手いのですよ。

スズキ：めちゃくちゃ上手い。チェコのブラチスラバの絵本原画展やボローニャの絵本原画展がありますが、今回のこの野間絵本原画コンクールというのは、要するに出版されていなくても出品できるという間口の広さを感じて、これは世界でも珍しい、非常に気持ちが熱いものを感じました。しかも、日本とアメリカとロシアとヨーロッパの国々が参加していないと、こんなにも楽しいかと、素晴らしい圧倒的な豊かさを感じました。360点ほどのものすごくたくさん量がありましたが、二日間ユネスコ・アジア文化センターに通って、目の玉がポーンと割れてしまうくらい、目が疲労しましたが、それでも時間が足りないくらいで、とても楽しい、有意義なことでした。

司 会：ありがとうございます。先ほど中国のツェン・ロンさんの「雷神」が出てきましたが、その中国の作品は非常に評価が高かったわけですが、グランプリの作品と比べて、どうしてグランプリになれなかったのか、お伺いしたいのですが。

松 本：票が足りなかったから。上手い人は、点はもちろん入るのですが、予想できる範囲の上手さなのです。だけど、グランプリをとったモンゴルの方は、もっと新鮮な驚きのようなものがあつたのでしょうか。上手に描く人だったら、あれは描けるよねというのが、僕の中にはありました。それから、その世界に入っていけるかといったらそうではない、楽しくない絵だったのかもしれない。

スズキ：やはりモンゴルの方は親しみ、身近さというものを感しました。

松 本：そうですね。

スズキ：例えば、「そのねえちゃん」と僕は言うのだけれど、もしNHKの人だったらインタビューする時なんか「そのお姉さま」と言って下さいとか、そういうようなことで、モンゴルの方はすごく親しみを感じて、あつたかいものを感じて、やはりどうしてもそっちになりました。

松 本：本当に上手くて、これはすごいと感動する時もあるのですけれども。

<もし日本のアーティストが応募したら>

司 会：それから先ほどスズキコージさんが、日本人は応募対象外であるとおっしゃいましたが、例えば、このコンクールに日本のイラストレーターが応募した場合には、結果としてどういうことが想像できますでしょうか。

スズキ：日本もアジアだから、今度日本を入れたらどうですか。来年あるのでしょうか。

司 会：このコンクールは、作品発表が制限された国を対象としてやっているのですが、仮に、日本の今のアーティストが応募した場合に、野間コンクールがどのように変わっていくか、是非ご意見をうかがいたいと思います。

松 本：単純には言えませんが、日本の今の若い絵描きたち、あるいはベテランを含めてでもいいのですが、ここに参加したとしても、グランプリを取れたかどうかわからない、むしろ取れないのではないかと思います、コージさんはどうですか。

スズキ：この前、みづゑ賞の審査員を飯野和好君と荒井良二君と僕と三人でやったのですが、今は、日本の場合、これは世界的なことかもしれないけれど、女性たちの絵本、イラストレーションが、とてもはりきっている、頑張っている人たちが、圧倒的に多い。みづゑ賞の大賞は、24歳の京都の女性が取ったのですが、その作品は、今、

日本列島でこういう絵が出てきたというのは非常にユニークだとは思いました。けれど今回のように、アジア、アフリカ、この中に日本が入った場合、やってみなければわかりませんが、そうなったら、とてもいいことじゃないでしょうか。審査が大変だ。

松 本：僕は、ヨーロッパでの展覧会の審査もしているのですが、絵本作りのテクニックという点では非常に上手い人たちがたくさんいる。今回の展覧会を見てみると、モンゴルもスーダンもそうですが、あの作品が、例えばヨーロッパの展覧会にぼんと行ったとしても充分戦える、一点の絵としての評価なら、おそらく賞を取るくらいのレベルにまでいくのではないかなという気がします。野間の一番重要なところは、出版するだけの条件、国力がない国の人たちが作品を寄せてくるわけですが、要するに、出版文化が盛んじゃなかったり、あるいは経済力がなかったりするからといって、そこのアーティストの力が劣っているということではないと思います。これはもっと簡単に言うと、古代エジプトや古代ローマや、日本の昔のものや縄文の土器などを見て、現代で同じレベルのものを作れるかという、決してそうではない。昔のものの方に圧倒的に感動することもあるわけです。ですから、科学技術の発達と、人間の創り出す芸術作品のパワーというのは、比例しないだろう、同じように発達しないだろうと思うのです。その意味で、僕たちがこの野間コンクールの中に出てきた作品をすごいと思うのは、そこにちゃんと人間として生きている感性のようなもの、ちゃんと自分が地に足をつけてきているというような、そういう作品が出てきているからじゃないかと思います。僕がこの展覧会の審査をするのが好きなのは、そういうパワーが伝わってくるからです。本当はこういう作品がちゃんと出版されていい絵本になると、絵本の世界全体のレベルアップにつながるのではないかという気がします。

司 会：松本さんは、BIB（ブラチスラバ国際絵本原画展）の国際審査員を何度かお務めになって、野間の審査員もお務めになって、両方を通じて、国として限定するのは難しいと思いますが、絵本を作ることに於いて、この国は面白い、なんだか活気づいてきているというような注目すべき国は、今ありますか。最近、先月ですか、ベトナムにいらっしやっていますよね。

松 本：僕自身は行かれなかったのですが。これはなかなか簡単には言えません。展覧会の印象で言うと、イタリアは最近面白い作品を作っている絵描きが増えている気がします。競い合う人が出てくると、そういう国が一気に伸びることがあるかもしれません。ただ、どの国がどうのこうのと、単純に国では評価できないような気がします。

スズキ：僕もそのへんは同意見で、オリンピックのように日本が優勝とかそういうのではなく、やはり個人の迫力ある生活が絵本に出てきているということで賞を選ぶべきだし、だから、国というのは後の問題です。その人の生活、それは架空の生活でもいいわけで、それに非常にリアリティがあって、感じるものがあれば OK だと思います。

＜過去の入賞者は今＞

司 会：それではここで話題を変えて、過去に入賞した方がどういう活躍をしているのかをご覧くださいと思います。野間コンクールも今回で14回目となりますが、対象となっているアフリカ、アジア、中南米では、まだまだ自分たちの国の作家が描いたものではなく、海外の書物や教科書、本に頼っている国が多く、そうなるくと自国の文化に価値観を置くのが非常に難しいというのが現状です。1996年にグランプリを受賞したマレーシアの画家についてご紹介したいと思います。覚えての方もいらっしゃるかもしれませんが、「やっぱりゾウがいちばん」というタイトルでマレーシアのユソフ・ビン・イスマイルさんがグランプリを取られました。この写真はグランプリを受賞した後、この野間コンクールの国際審査員として審査に加わっている様子です。彼についてはこの受賞がきっかけとなり、非常に活動の域が広がったと、本人から報告されています。日本のテレビなどでも活動状況が報告されています。これは、彼がマレーシアの市内に開いている個人のアトリエです。マレーシアのツインタワーが描かれています。画家としてのビジネスが成り立つのは非常に難しいということで、自分の活動をしつつも観光で訪れた日本人やその他の国の人たちに絵を売って、その資金で自分の好きな活動をしているという状況です。これが彼のアトリエです。象がシンボルになっています。彼はマレーシア国内だけではなく、インドネシアに拠点を持って、インドネシアのアーティストを奨励するようなワークショップをたくさん開いているという報告が入ってきています。当初は、かなり生活が苦しくて、彼の奥さんがマッサージ業をしながらアーティストとしての生活を支えていたそうです。これは、マレーシアのクアラルンプールにある国立小児病棟です。彼の発案で、病院が殺風景だったので、子どもたちのために、自分とマレーシアのアーティスト仲間に描かせたいろいろなアートを壁に飾ったり、小さな図書館を作るような活動をしたりしているということです。一番端に写っているのが彼の奥さんです。これが小さな図書館です。火曜と木曜日に曜日を決めて、読み聞かせをしてくれるボランティアの人たちに集ってもらい、病院側と協力して活動をしていると報告されています。

それから次に、もう一つ注目していただきたい野間コンクール対象地域から送られてきた作品。紛争地域にある国のアーティストというのは非常に抑圧された

立場にあり、困難な状況にあるため、活動していてもなかなか作品を送ってこられない状況にあります。そういった場合には、ジャーナリストが日本に帰国する際、自分たちの描いた作品を持って行って欲しいと託してくるわけです。イラクの女性画家のインタラク・M・アリさんは、二、三回前からこの野間コンクールに応募してきて下さっています。当時は、自分の作品が着いたかどうかを確認するために大変な思いをして向うから国際電話をかけてきました。作品が着いたかどうか、いついつ送ったので着かなければ連絡が欲しいというような交信がありました。この方の作品を見ますと、第11回奨励賞を取っています「つめのあと」という作品は、地球がいろいろな紛争や環境問題によって美しさが失われていってしまうということをテーマにしています。非常に印象的な作品でした。さらに、二年後の第12回でまた奨励賞を取っています。「わたしたちの国」というテーマで作品を送って来てくれました。これは前回にも増して衝撃的な作品でした。イラクで一体何が起きているのかを想像すると、大変なのだろうと思ったのですが、この内容は、はるか昔、一匹の大きなヘビが僕たちの国の空を覆い隠してしまった。美しい太陽は姿を隠し、ヘビはあたりに毒と狼たちを撒き散らした。それが僕たちの苦難の歴史のはじまりでした。平和を守った立派な人々の魂は平和の谷で安らかに眠っている。ヘビのばら撒く闇と毒にも負けず、私たちの夢と希望は色彩に溢れている、というストーリーで作品を送ってきているわけです。この後、戦争後にイラクに入った日本人ジャーナリストの話では、バクダッドにある彼女のアトリエは粉々に崩れてしまったので、今活動の拠点を探しているということでした。野間コンクールには様々な状況で作品を応募してこられる方がいらっしゃいますが、最後に、今日の楽しいお話を伺ったお二人に感想を一言ずつ伺いたいと思います。

<対談の終わりに—様々な文化との出会い>

松本：先ほども言ったのですが、こういう展覧会を行うことによって、私たちは知らない世界と出会うことが出来ると思います。知らない文化に接することが出来る。もちろん日本の文化、アメリカの文化、ヨーロッパの文化にもそれぞれ優れたものがあると思いますが、実は、文化というのは世界中どこの国でも同じように貴重で大切なものです。それぞれの歴史を持ってそれぞれの文化が創られてきているわけです。現代の絵描きたちは、その歴史の上に立って自分たちの仕事をしているわけです。私たちはいろんな世界の文化を、こういう展覧会で知ることが出来るのは大変重要だと思っています。これは大切な展覧会なのでぜひとも長く続けていって欲しいと思います。

スズキ：僕は音楽が大好きで、よくCD屋のワールドミュージックのコーナーへ行きます。アフリカや、この展覧会の出展の国々のCD、音楽が好きで、けっこうな量のCDを

持っています。今回、審査員をやらせてもらって、想像ですが、こういうミュージックがあったのかと、絵から僕が目を見て聴きました。そういう感じなのです。それがとても楽しくて、僕らは日常に、さっき言った日本を含めて、アフリカ、ヨーロッパのミュージックをしょっちゅう耳にしますけれど、まだ知られていない、まだスポットライトが当たっていないミュージック、それは絵本の原画を見て感じるわけですが、それがこれからもっと盛んになってもいいと思っています。

司 会：ありがとうございます。楽しいお二人の話を伺っている間に時間の経つのも忘れてしまいましたが、終了する前に、皆様方からご質問等がありましたらお受けしたいと思います。せっかくの機会ですので、これだけは聞いてみたい、こういう作品があったけれどもどう思われるかなどという質問がありましたら是非いただけますでしょうか。だいたい遠方からお見えになっていらっしゃる方もいらっしゃると思います。この会場の中で絵を描いている方がいらっしゃったら是非。絵本作家を目指していらっしゃる方とか。

スズキ：僕も目指してます。本当は日本国籍なのに、ガテマラ人だと言って参加してしまおうかな。だけど、日本の審査員に見破られるかな。この絵は見たことあると。

松 本：でも顔写真だったらバレないかもしれませんよ。

スズキ：なるほど、顔写真だったらいろいろなお面をたくさん持っているので、けっこういけるかも。そういう楽しさがあるよね、野間コンクールは、とっても面白い。

松 本：時間の関係で用意されていた画像から外されてしまったのですが、韓国のチェ・エジョンさんの「カタクチイワシの夢」は興味深い作品です。僕が何でこの人を推したかと言いますと、朝鮮民画の伝統を現代の中にどうやって活かそうかと一生懸命考えている人だからです。それぞれの国には大切な文化があって、それを現代にどう継承していくかに面白さがあるのです。美術の面白さは、いろいろな側面があって、例えば、コージさんの絵の面白さは、日本なのか、あるいはどこなのか見当もつかないような、自由さですが、もう一方で、その国にずっと培われてきた文化を、現在にどう継承して、発展させていこうかと考えている方が必ずいるのです。ところで、コージさんの絵は、一体どこに元があるのですか。

スズキ：それは、お医者さんの立場の松本さんに教わりたいくらいです。僕のルーツというのは、例えば、浦島太郎伝説というのは、バリ島の方まであるようです。日本海、日本列島周辺から東南アジアの方まであるようです。僕自身、古代にあっちの方か

らカエルに乗って遠州灘、浜松の方に流れ着いて、それでこういうルーツにきたのではないかと思われる節があります。だから、浦島太郎という伝説も、どこで発生したかは知りませんが、バリ島に行った時に、ガムランミュージックは、竜宮城音楽だと僕は思いました。ギンゴゴゴゲゴ・ボンデンボンデン…。

松 本：やはりバリ島とかそういうところに行くと、ここは自分の故郷みたいに感じるのですか。

スズキ：あとは、メキシコに行った時に、オワハカ州に美術館があって、先住民の人たちの作品が展示してある。そこに鋏で切った、切り絵があって、まぎれもなく僕が古代メキシコに暮らして切ったのではないかと思われるものあって、蕁麻疹が出るくらいびっくりしました。とても酷似していました。最近メキシコへ行って発見したので、影響されたとかは何もありませんが、たまたま同じようなセンスを持った人が古代メキシコにいたということなのです。

松 本：去年、コージさんが大画面に絵を描いているのを横で見れていたことがありました。先ほど好きな食べ物から食べると言っていましたが、その時にどこから描き始めるのかと思って見ていました。あるところから描き始めて、空間がどんどん広がって行って、その面白さを堪能しましたが、絵を描いている時の気持ちというのはどんなものですか。

スズキ：松本さんが見てくれたのは、京都造形大学で4×2メートルほどの大きな絵を、ホールでライブペインティングということでやっていたのですが、あの時はたしか、ほとんど手で描いていたようなもので、最近では筆で描くのが嫌になってきて手で描くのです。キャンバス地なので、さすがに手が破けてきて痛くなると筆を使うので、筆がこういう事から出来たということがよく分かりました。僕は絵描きで五十年以上やっていますが、とにかくこうやってしゃべっている時間があつたら、もう描くしかない。僕は手で描くのですが、筆も使いますが、要するにここから何か出てくるわけです、今の僕の状況が。考えていることや、さっきコロッケパンを食べましたが、そういう栄養分が出てくるわけです。そういうものが正直に出るのが絵だと思っています。だからもし今日ここに、絵本作家を志している方がいたら、本当に面白い生活をして下さいと思います。絶対それが絵本や絵に出てきますから。それが喜びにつながっていったら、もう最高だと思います。

松 本：絵の中に、いろいろな意味での物語のようなものを感じますが、あれは、描く前から構成している感じがしません。描きながら見えてくるのですか。

スズキ：こればかりは七不思議でして、自分でもよく分かりません。患者側ですから、症状を出すわけです。とにかく、だーっと描いて行って、皆さんに感じてもらおうということに尽きるのです。よく若いイラストレーターの人たちに、この絵のテーマは何ですかと聞かれますが、テーマなんて考えていなくて、とにかく今描けるものがどんどん出来てくるわけですから、その後に題名を決めたりすることがほとんどです。

松 本：インドの北の方にミティラーという所があって、新潟にも美術館があったと思うのですが、そこの女性たちが皆、壁に絵を描いている。

スズキ：爪楊枝みたいなのですか。

松 本：そうです、竹ペンです。昔東京都の近代美術館で、実際に描いている人たちを見ていたのですが、何気なく隅っこから描き始めるのです。歌いながら描くのです。歌いながらだんだんと全体が出てくるのです。何も考えずに描いているように見えるのですが、ちゃんと着地します。ガムランの音楽は最後で、ばんと後ろできまるでしょ。そういう、どこからか始まって、自然に流れ出るようにあふれ出てきて、最後に上手い具合に着地しているということに驚いた記憶があります。ユージさんタイプの絵描きというのは、おそらくそういうスタイルの人間だと思います。それは、人間の本能的な感覚をベースにしたタイプの画家です。もう一方で、今回言うところのコロンビアの人が割にそうかもしれませんが、構築的に、一つの小宇宙を一枚の絵の中に創ろうと意識をして描いているタイプの人があります。これは、論理的なヨーロッパ的な考え方です。例えば、医者が人体を治す時に、胃が悪ければ、胃を切除すればよくなるはずだと言うような、分析的にどこが悪いかを細かく分けていく考え方。確かにルネサンスの美術のように完璧に構成された世界の面白さというものもあります。また、音楽でも、しっかりと構成された音楽も美しいし、どこからかにじみ出てくるようなパワーがある音楽も美しいと思います。美術、あるいは音楽もそうですが、いろいろなタイプの楽しさが世の中にはあることを認識しなければいけないです。時々、審査をしていて困ることがあります。どの価値基準で判断していいのか分からない時です。ヨーロッパ的な価値基準で見るとは割に簡単ですが、そこから完全にはみ出ているところで、けどどうしようもない感動がある時があるのです。これはやはりちゃんと評価をしなければいけないと思います。文化というのは一元的ではないと感じています。

スズキ：僕の描き方というと、昔、白い紙にみかんの汁を爪楊枝で描いて、火鉢であぶっ

ていくと絵が出てくるものと同じで、しいて言えば僕の描き方はあぶり出し方式と言えるわけです。

司 会：ありがとうございました。

松 本：この絵がにじみ出るという絵ですね。

司 会：これも、大賞を受賞されたスーダンのアフリカの方です。

松 本：この人はコラージュで描いているように見えますが、たぶん切り抜いて貼っています。丸いものとかいろいろなものを切り抜いては、べたべた貼るタイプの人です。これは、全部貼っているかどうか。

司 会：原画を見ると、引っかいた跡があります。

松 本：そうそう。すごく好きなことをやっているのです。やりたいことをやりまくるタイプの人だろうと思います。

司 会：楽しいお話を伺っている間に時間が過ぎてまいりまして、ここらあたりで対談を終わらせていただきたいと思います。この国際子ども図書館で展示は五時までになっております。お話を伺ってまた新しい発見もあるかと思しますので、是非皆さまそちらの方へ足を運んでいただきたいと思います。図録も販売しておりますので、こちら是非ご購入いただきたいと思います。収入はこのコンクールの運営資金に反映させていただきたいと思しますので、是非よろしく願いいたします。短い間でしたが、お二人にいろいろなお話を伺うことが出来ました。スズキさん、松本さんどうもありがとうございました。